深圳テクノセンターから
「你好中国！谢谢中国！」

外国語学部
中国語学科３年

阿部 美里

1 はじめに

ただ教科書と向き合う中国語学習に、何か物足りなさを感じていました。「今まで勉強してきた中国語を発揮する場はないだろうか？」、「残りの大学生活で何か挑戦できることはないだろうか？」と考えていた時、孫安石教授からこの「深圳テクノセンターインターンシップ」への参加を薦めていただきました。

また、普段私たちの生活のなかには数多くの「MADE IN CHINA」「中国製」のものがあります。それが実際どんなところで、どんな人によって作られているのか、ということにも興味がありました。

2 深圳テクノセンターとは

中国広東省深圳市に所在する深圳テクノセンター。

日本の各企業はテクノセンター内の施設を借り、機械設備を設置し、工場の運営管理を行うことができます。また、工場設置やインフラ利用に必要な申請許可や交渉はすべてテクノセンターが行ってくれるのです。

つぎに、テクノセンターは各企業に必要な労働力の確保、人材派遣、資材調達、製品販売、税関、法務、通関、物流等の業務を代行し、さらには従業員の食堂、寮、また自家発電装置もテクノセンターが提供しています。

テクノセンターのエントランス。

このように、中小企業は機械と技術を導入するだけで工場を簡単に設立することができるので、資源に制限のある中小企業でも中国・深圳への進出が容易になっています。

3 企業訪問の前に

このインターンシップには決められたカリキュラムがありません。つまり、自分で自分なりの研修プランを立てることができ、もちろんやり方次第で人それぞれの経験ができるのです。

まず、テクノセンターから配られた企業リストを基に、おおまかな2週間の行動計画を立てます。そして自分が訪問したい企業に電話でアポイントメントを取り、企業見学へ行く、というシステムでした。

言葉では簡単に収まりますが、この〝アポ取り〟が何よりも大変でした。この研修には20人の大学生（尾道大、神奈川大、関西大、静岡大、静岡県立大、筑波大、長岡大、文京学院大、桃山学院大、立命館アジア大）が参加していたので、まずはその20人全員がどこの企業に見学へ行きたいのかをまとめます。そして代表者が電話をかけ、アポイントを取り、予定表に時間や結果を記入します。

日本企業とはいうものの、初めに電話に応答してくださるのは中国人の方なので、中国語で自己紹介、用件を伝え、日本人の工場長（社長）さんに代わっていただく必要がありました。

これが第一の難関で、相手に伝わらず切られてしまったり、自分が伝えることができても、その返答を聞き取ることができなかったりと、何度も失敗をしました。それでも、今まで勉強してきた中国語を発揮できる場として、片言の中国語ではありながらも一生懸命伝えること、聞くことの大切さを身にしみて実感できました。

予定表で企業見学の情報を共有。

そして第二の難関は工場長（社長）さんとの電話対応です。もちろん相手は友達ではなく、目上の企業の方なので、言葉遣い、声の大きさが重要になってきます。頭ではわかっていても意外に難しいもので、これから就職活動を控え、社会に出て行く私としては、普段から定着させていかなくてはいけないと痛感させられました。またこの期間、深圳市内では「第26回ユニバーシアード競技大会」が開催されていたため、休業中の企業も多く、なかなか自分の研修計画どおりにはならない部分もありました。しかし、この電話ひとつにおいても、私にとっては自分の成長につながるいい経験ができたと思います。

4 企業訪問

日本で買い物をしている時によく目にする「MADE IN CHINA」や「中国製」の文字。その文字を見るたびに、「中国製かぁ…すぐ壊れそう…」と正直思うことがありました。なぜなら私の中の「中国」は「適当」、「雑」なイメージでしかなかったからです。

しかし、実際に工場（D社、F社、H社、K社、N社、M社、P社、T社など精密機器製造社から下着製造社などさまざま）で働く中国人ワーカーさんたちの様子を見て驚きました。そこには、立っているだけでも体力を奪われてしまいそうな蒸し暑い工場の中で、ひとつひとつ丁寧かつスピーディーに仕事をこなす中国人ワーカーさんの姿がありました。

実際に近くで見させていただくと、隅から隅まで本当に細かく丁寧で、次々と機械から出てくる製品にも負けないくらいの速さで作業をされていました。機械は動き続けているのだから、どんな

H社企業訪問

にサボりたくても、休憩したくても、自分勝手にはできないのです。

「”一生懸命“ってこういうことなのだな。」と、その言葉の意味を気付かされました。

なにも知らずに、「中国製は雑」と、偏見を抱いていた自分がすごく恥ずかしくなりました。

つぎに、工場見学のほかに、工場長（社長）さんにもお話を伺いました。中国人ワーカーさんの離職率は未だ高いものの、とても責任感が強くまじめなワーカーさんが増えているとのことでした。その背景には、工場長（社長）さんとワーカーさんの間に「信頼関係」が築かれているのだと思います。実際に、日本人でも中国人でも変わりはない、とおっしゃる工場長さんがほとんどでした。つまり、日本人だろうが中国人だろうが、日本製だろうが中国製だろうが、大きな違いはないのです。

また、ワーカーさんたちのモチベーションを上げるために、仕事の成果を目で見てわかるような個人成績のグラフがありました。グラフといっても、頑張った分シールを貼っていくという簡単なものでしたが、そのおかげでワーカーさんたちの働き方はさらに良いものに成長しているそうです。

ワーカーさんのほとんどが農村からきている出稼ぎ労働者ですが、その人たちがみな技術をつけていくのですから、中国は本当に強国に成長していくだろうと目に見て実感しました。

5 寮生活について

正直初めは言葉を失いました。今にも貫通しそうな薄っぺらなベニヤ板の上で眠り、トイレの上で浴びる水シャワー、小さな水道で洗う洗濯物、天井の扇風機からは油のような汁が降ってきて洗ったばかりの洋服も染みだらけ…あまりにも衝撃的な光景でした。初日、シャワーを浴び終えると涙が止まりませんでした。自分と同世代の子が毎日こんな生活をしているのに、私はなんて贅沢で幸せな暮らしをしていたのだろうか…すごく複雑な気持ちでした。

毎朝毎晩、化粧をするわけではないけど、自然堂という中国では高級な化粧品会社の化粧水と乳液を一生懸命塗る姿を目の当たりにし、とても胸が痛くなりました。彼女たちも女の子、お洒落をしたい年頃。少ない給料で買ったものを大事そうに使う姿は、日本で生活している私にとって目に焼きつく光景でした。そんな彼女たちに感化され、日が経つにつれいつしか生活にも慣れていき自然に楽しむことができました。

私の部屋 A312 号。二段ベッドが 6 個。

この彼女たちの生活は、私の価値観を変えるきっかけにもなりました。

また、夜にはワーカーさんや保安官の方たちとバスケ、卓球、バドミントンをしたり、日本語を勉強しているワーカーさんに日本語を教えてあげたり、中国語を教えていただいたりととても充実した寮生活でした。

（左から）劉さん（21）、私、王さん（21）、Ｃちゃん（長岡大３年）みんな同い年。

6 さいごに

「你好！」、「謝謝！」という言葉が大好きになった2週間でした。

日本を出国する前、「テクノセンターってどんなところだろう？」と楽しみにしていた反面、「深圳？」「テクノセンター？」と初めて耳にする言葉ばかりで不安もありました。家族にも友人にも「そこはどんなところ？」と心配されていましたが、その時私はハッキリとした返答ができませんでした。

お世話になった保安官のお二人。

「行ってきたらわかる」と一言だけ告げ、私は日本を出発し、深圳の街へ行ってきました。

中国語を勉強している私にとって「中国」には何かと親しみがあり、中国語への抵抗もありませんでした。しかし、「中国人」への印象は「無愛想」、「怖い」、「適当」など悪いものばかりでした。そんな私の固定概念もすぐに覆されることになりました。

テクノセンターでも、買い物中でも「你好！」と挨拶をすれば「你好！」と返してくれる。「謝謝！」という言葉にも何度も何度も出会いました。

中国へ行く前はこんな楽しい生活を想像することもできませんでした。たくさんの人に出会い、「你好！」と挨拶を交わし、温かく受け入れられ、「謝謝！」で終わる。本当に素晴らしい経験ができました。

中国語といえば「你好！」、「謝謝！」と答える人も少なくないでしょう。たくさんの日本人にも知られているので簡単な言葉にも思えますが、今回の旅のなかではすごく意味のある魔法の言葉でした。このふたつの言葉の中には、私の思い出がたくさんつまっています。この気持ちは忘れたくありません。

寮の外観。夜も蒸し暑い。

また、このインターンシップでは命、お金の大切さを改めて認識させられました。テクノセンターから、工場長（社長）さんから、一緒に研修を受けた学生みんなから、ワーカーさんから、中国の人々から、中国の町並みから、と私が出会ったすべてのものから刺激を受けることができました。

この2週間という限られた時間ではありましたが、「自分で自分なりの」をモットーに行動し、その経験が私の成長に繋がるものになったと思います。

文章では表現できない素晴らしい「何か」が中国にはあるのです。本当に心に残るかけがいのない経験ができました。謝謝！！！